

新型コロナウイルス感染症から 考える宗教の役割

—慶讃法要をお迎えするにあたって—

二〇二一年十一月十二日、第十回宗門教学会議がオンラインにて開催されました。今回のテーマは、「新型コロナウイルス感染症から考える宗教の役割―慶讃法要をお迎えするにあたって―」です。

新型コロナウイルス感染症（以下、新型コロナウイルス感染症）が流行し始めて、約二年が経過しました。その間、日本では緊急事態宣言やまん延防止等重点措置が繰り返し発令され、私たちの生活は今も大きく制限され続けています。

私たち宗門においては、二〇二二（令和五）年に親鸞聖人御誕生八五〇年・立教開宗八〇〇年慶讃法要が勤められます。「慶讃法要」まで二年を切った今、新型コロナウイルス感染症の流行によって引き起こされた事態の人類史上の意味を検証しつつ、「慶讃法要「趣意書」」に記された危機意識と「より多くの人びとと心を開いて共に生かされて生きることの尊さと、喜びを伝える開かれた宗門へ」という法要の目標を再確認し、諸活動を迅速に展開していかなばなりません。

そこで本年の宗門教学会議では、新型コロナウイルス感染症流行下において、「親鸞聖人御誕生八五〇年・立教開宗八〇〇年慶讃法要」をどのようにお迎えすれば良いのか、また新型コロナウイルス感染症が流行した世界において宗教の役割は何なのかという二つの困難な課題を問うために、「新型コロナウイルス感染症から考える宗教の役割―慶讃法要をお迎えするにあたって―」をテーマとしました。

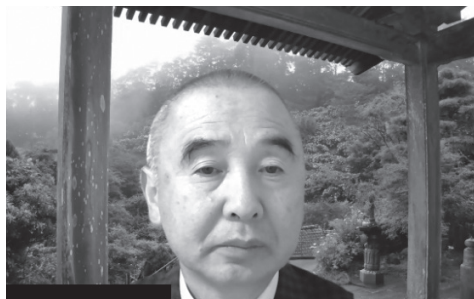
第十回宗門教学会議では、会議委員として東京大学大学院人文社会系研究科教授の蓑輪顕量氏、東京大学名誉教授の小林康夫氏、勸学寮頭の徳永一道氏をお招きしました。座長は、浄土真宗本願寺派総合研究所所長の丘山願海、司会は、浄土真宗本願寺派総合研究所副所長の満井秀城が務めました。

なお、前回（四月号）は有識者の提言を報告いたしました。今回は全体討議を報告いたします。

○満井 どうぞよろしくお願いたし
ます。まずは蓑輪先生のご提言に、私から
質問させていただきます。

二年後に控えております、親鸞聖人御
誕生八五〇年・立教開宗八〇〇年慶讃法
要について、宗教的感動を含んだ法要に
するために、先生からお気づきの点がご
ざいましたら、ご提案いただきたいと思
います。

もう一点、われわれは「後生の一大事」
に関わる聞法を一番大切にしておりませ
が、新型コロナウイルス感染症の拡大に



よって、重要な法要、あるいは聴聞の場
が必要不急の扱いにされました。不要不
急と単純に割り切るのではなく、自信を
持つて臨みたいという思いもありますの
で、そういう点からご提言いただけたら
と思っております。

最後に「はからい」ということについ
て、修行道の観点から第二の矢を受けな
いという在り方について妙好人の実例を
出してくださいました。しかし、そうし
た妙好人の在り方を第三者から見ると、
不条理に諦めさせられているのではない

最後に「はからい」ということについ
て、修行道の観点から第二の矢を受けな
いという在り方について妙好人の実例を
出してくださいました。しかし、そうし
た妙好人の在り方を第三者から見ると、
不条理に諦めさせられているのではない

かと言われることもありますので、正し
く見る、正しく知るといふ点を再度ご教
示いただければと思います。

一・法会の目的

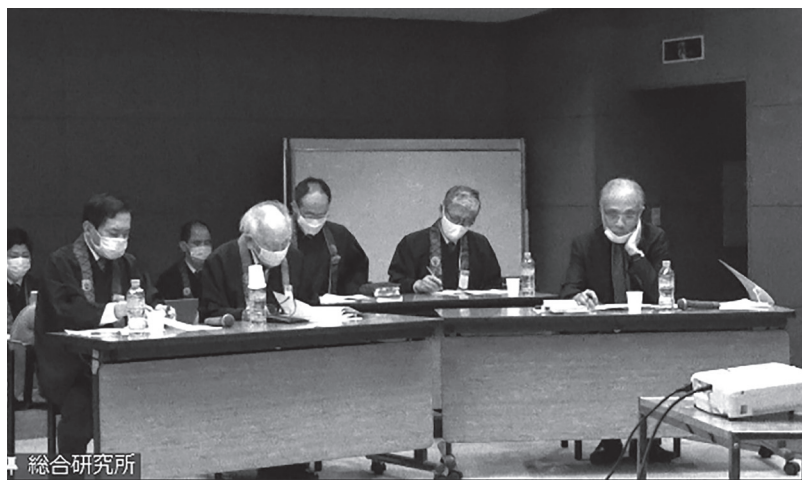
○蓑輪 最初に、法会についてですが、
多種多様なものが存在していたよう
です。

例として挙げた東大寺のお水取りは、
正式には十一面悔過じゅういちめんげかと呼ばれ、「悔過」、
過ちを悔いて懺悔をするというのが、一

蓑輪顕量氏

【略歴】

一九六〇年生まれ。博士（文学）。日本学術振興会特別研究員、財団法人東方研
究会専任研究員、愛知学院大学文学部日本文化学助教授、教授を経て、現在、
東京大学大学院人文社会系研究科教授。二〇二〇年より日本マインドフルネス学
会の理事を務める。専門は日本の仏教、仏教思想史。一九九九年に日本印度学仏
教学会賞を受賞、二〇〇〇年に中村元賞を受賞、二〇〇三年に鈴木学術財団特別
賞を受賞。著書に、『中世初期南都戒律復興の研究』（法蔵館、一九九九）、『日本
仏教の教理形成―法会における唱導と論義の研究』（大蔵出版、二〇〇九）、『日
本の宗教』（春秋社、二〇〇七）、『仏教瞑想論』（春秋社、二〇〇八）など。



番の目的になっています。今日は經典を講説する根拠のための法会を軸に話をしましたが、經典の講説、悔過、それから仏教教義をきちんと深めていくための論議の場としての法会という三つぐらいに

分類されます。

また、実際の法会の場として、民衆の方たちを相手にしたものが現実には存在していて、多くの人たちが聴聞に訪れ、お坊さんのお話を聞いて、大事なものの見方を教わっていき、身に付けていくということが行われていました。ですので、法会はいろんな目的で設計されていたということは確認しておいていいと思います。

慶讃法要に向けてというところですが、何を目指していくのか。感動を目指すのか、教えの確認を目指すのか、あるいはまたちよつと違ったものを体験するものとして考えていくのか。それによって、組み立ては縦横無尽にできるのではないかという気がいたします。感動的なものを考えるというのであれば、例えば音楽、あるいは劇などは私たちのところを動かしていく一つの手段になることは間違いありません。

それから、自分たちが犯してきた罪咎というのでしょうか、知らず知らずのう

ちに犯してしまったマイナスの部分意識させ、それを反省するといったタイプのもものも、あっていいかも知れません。奈良の地に伝わっている悔過法要には、仏さまの名前をと覚えて、五体投地を繰り返していくというものが存在しています。そういう実際のな部分も法要の中に組み込んでいくというのは、新しい試みとしてあってもいいのではないかと思います。

次に、寺院にとって大事な聞法の場が、新型コロナウイルス感染症の流行によって奪われてしまったというのは、いろんな宗派の方たちから聞いています。聞法はすごく大事であります。仏教の学びの体系は、よく聞・思・修といわれます。「聞」は、ちゃんと聞くこと、その次の「思」は、自らそれを考えてみることに、最終的には「修」、実際にやってみることに、実習することです。最後に実際に行うことが入ってきます。

そのため、新型コロナウイルス感染症流行の中で「聞」ができなくなってしまうと

き、そのことに対応しようとして実際に動いた人たちの話を聞きました。具体的には、オンラインの活用でした。例えば、台湾はテレビを使って宗教活動をするができるという大変自由なところがあつて、二十四時間というわけではないですけど、昼間は、どこかのチャンネルでお坊さんたちがお説教している。あるいは法会みたいな感じで何かをやっているとこののを見ることができません。不要不急の扱いをされて、今までと同じようなことはできないという状況で推移せざるを得なかったところがありますけども、少し工夫をすれば、新しいかたちで発信できるというのもわかってきましたので、それをうまく使えるといいのではないかと思っています。

二. 「はからい」のない境地

それから、「はからい」の点ですけども、第二の矢を受けないということ、私たちが次の反応を起こさないというの

は、マイナスの反応を起こさないということに焦点を当てるべきだと思えます。つまり、怒りの気持ちだとか、悲しみの気持ちなどですね。悩みや苦しみという言い方がされますけれども、それを起こさないで受け止める。受け止めた後、どうするかということは、現実存在している社会の問題を、介入するために動くということができないのではないかと思います。

非常に面白い方をしている現代の仏教者として、ベトナムに生まれて、フランスで活躍されましたテイク・ナット・ハンさんという方がいらっしゃいます。テイク・ナット・ハンさんは、マインドフルネスという名前で仏教の修行を表現していますけども、それによって何が可能になるのか。それは、いろいろなことがあつても、感情的な問題を起こさないで、さまざまな事態に対応できるようになると言われています。マインドフルネスを実践することによって、私たちのころの中に新しい解を生んでいく。その

新しい解ができてくると、悩みや苦しみを起こさないで、現実の社会の問題に対応することができるようになっていくと説明しています。

これは仏典の中にも同じような記述がありまして、「身体に関する注意」という名前の経典がありますが、そこに十個ほど功德が挙げられています。興味深い記述は、いろんな問題があつたときに、私たちのころにさまざまな反応が起きても、耐えられるようになるという記述が出てきます。直面して生じてくるころのはたらきに支配されないで、流していき、その問題に正面から取り組んでいくことができるということが大事ではないかと思っています。

そして、そうした修行の世界の方から出てくる「はからい」のない境地、戯論の生じない境地に、信の世界からも到達できるということなのではないかと考えています。

○満井 ありがとうございます。ここで関連してお尋ねしたいと思います。

「現代の法要において大切にすべきこと、あるいは失われてしまった大事なことなどがあれば、ご教示ください」という質問をいただいています。

○**蓑輪** 現代の法要とか実際に伝わってきているものは、やはり文化的・歴史的な背景があつてできあがつてきていると思います。ところが、それがなぜそのようになったのかということ、私たちはほとんど知ることなく、法会の場に参加していることが多いのではないのでしょうか。特に現代の人たちは、いろいろなことについて知識が豊富になってきていますから、理由がしっかりしないと意味を見いだしてくれないといった状況になってきているような気がしますので、説明することは必要なのではないかと思っております。

実際に法会で経典を読誦することが多いと思いますが、私たちのこのころを一つのものに集中させていく、専心させていく効果があります。経典を読むというのは、教えを理解するという意味でも確

かに大切な部分はあると思いますが、何か一つのものに集中していくことによつて、他のところはたつきが起きないという、仏教の修行道とつながっていくところがあります。

そもそもなぜ法会をするのかというところから、その法会の構成要素になっていくものがどういうものなのか、なぜそういうことをやるようになってきたのか、それが何をもたらしてくれるのか、こういったことの説明は、あつてもいいのではないかと思います。

三、「はからい」と「目的論的構造」

○**満井** ありがとうございます。小林先生に質問させていただきます。先ほど宗教的な意識さえない人でも、最も原初的なかたちとして「祈る」ということを、大江健三郎氏の例で挙げてくださったわけですが、信仰心が無いと言っている人でも「祈る」という原初的な形態は起るのであるならば、今まで仏縁がなかつ

たような方々に、その仏教的内容、あるいは真宗の内容を伝えるときには、どんなふうに汲み上げたら効果的だろうかということでございます。もう一つは、オペラ化についても少しおっしゃっていただけたらということでございます。

○**小林** 蓑輪先生がお名前を出したティク・ナット・ハンという僧ですけど、彼の本を私は昔からフランス語で何冊も読んでいます。そのなかで衝撃的だったことがありました。そこでは、「食器を洗う」ということは、きれいな食器を得るためのものではない」と書いてあったのです。いいですか、皆さん。「きれいな皿を得ることが皿洗いをする目的ではない」と言うのです。「皿を洗う」とは、きれいなお皿を得ることではない。すごいです。では、何なのか。まさに「何かのため」ではない、ということなんです。ここで大事な点は、目的論的構造です。これこれのためにやる、と人間は常に、時間を先取りします。われわれは常に、目的論的に自分の時間を構成して、常に



何かのためになると自分を規定する。例えば、世界平和のために、SDGsのためになどと目的論的な構造をつくりだす。それこそが「はからい」です。その「はからい」を捨ててしまったらどうでしょうか。全部捨ててしまつて、「はからい」がないところで、法会をやつてみてはどうでしょうか。しかし、どこかで矛盾していますね？ どう「はからい」を超えていくのか、超えていかないのか。それが中心的な問題ですが、私は

それ以降、台所で皿を洗いながらいつも思います、「これは、きれいな皿を得るためではない。では何だ？」と。そのとき急に、それが一つの儀礼のように見えなくなるんです。皿をきれいにするのはなくて、ただ皿を水に浸して、洗っている中に、別に感動しないんですけれども、何か非常におごそかなもの、宗教的なものの地平というか、「祈りの地平」というか、そうしたものが浮かび上がってくる。そう感じるのです。

もうひとつは、「オペラ化」のことですね。われわれが地球という一個の星に住み、その地球の周りに月があり、その全体が太陽の周りを回っている。でも、それは全宇宙から見れば、本当にわずかな小さなものです。世界は広大です。一三六億光年彼方へと、宇宙は広がっているという最新の自然科学がもたらした世界理解と、どこかで宗教が一つの「縁」を持たなければ、今のこの時代を共に生きることはできないのではないかと私は

小林康夫氏

【略歴】

一九五〇年生まれ。パリ第10大学で博士号を取得。東京大学名誉教授。東京大学教養学部助教授、教授、評議員、21世紀COEプログラム「共生のための国際哲学交流センター」拠点リーダー、グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCPC)拠点リーダーを歴任。二〇一五年より二〇二〇年まで青山学院大学院総合文化政策学研究所特任教授。専門は表象文化論・現代哲学。二〇〇三年にフランス政府より Chevalier des Palmes académiques (学術栄誉賞) を授与される。著書に、『若い人のための10冊の本』(筑摩書房、二〇一九)、『人間』への過激な問いかけ―煉獄のフランス現代哲学(上)―(水声社、二〇二〇)、『フランス現代哲学との遭遇(下)』(水声社、二〇二〇)、『存在の冒険』(水声社、二〇二二)など。

思います。そして、そのときに阿弥陀仏という存在は、大乘仏教の中でまさにそういうものとして登場していることを私は感じます。

われわれは宇宙的な存在である、地球的存在であるという自覚を持つことが、いま必要ではないか。今の時代、一人ひとりが求めている何か、それは宇宙的であるのではないか？ それは目的論的に求めているのではなくて、自分の存在の在り方として求めている。この世のなかで、このように欲望にまみれて生きていくだけではない何か、私の存在と共にあるはずだという感覚、そこに何を言っただけかです。しかし、それは当然のことながら、そのようなことを経験している人でなければなりませんね、教義ではなく。

先ほど法会の話がでしたが、法会において最も重要なことは、「誰」がやるかだと思えます。同じ形式を取っても、誰がやるかによって現れてくる世界はまったく違うと思っています。

四．「一人」と「共に」

○満井 われわれが自明のものと思っ
ている枠をいったん解体して、存在そのものを問い、存在そのものを見つめるとい
うところから、われわれの歩みを始めて
いこうというふうに考えております。寮
頭和上、両先生のご提言を受けていかが
でしょうか。

○徳永 浄土真宗に関して、「信心は一
人ひとりのしのぎの問題だ」という雰囲気
が非常に強うございます。家族も一緒
に生きているこの社会ですけれども、そ
れさえ私の救いには関係ないんだという
ような雰囲気が強うございまして、そう
したことを先生方は外からご覧になっ
て、どう思われるか。ちょっとお聞かせ
願いたいと思います。

○小林 例えば、この場に女性がほとん
どいないというのは、衝撃的ですね。と
いうのも親鸞聖人は、まさに女性のため
に教えを開いたとも言えると考ええるから



です。その意味で、親鸞聖人がその時代
のタブーにあえて挑戦して、自分自身も
結婚することによって、家族的つなが
り、女性とのつながりを問うた。その教
えを継ぐのであれば、当然のことながら
浄土真宗は、家族というものをどう考え
るのかということは原点の問い、いまで
も生きている問いだと思います。

○徳永 実際のお寺の法座では女性の方が圧倒的に多いので、べつに排除しているわけではないです。

もう一度お尋ねしますが、一人ひとりのしぎの問題、後生の一大事だという面が、外部からご覧になって、気が付かれたでしょうか。

○小林 私は事態がよくわかっていないのですが、究極までいけば、自分の存在の最後の往生とか、浄土とか、あるいは死というものは、どこか自分一人だけのものであって、家族だから共に、とはならない構造を持っていると思います。

けれども同時に、私は今、家族と共に生きていくという感覚も非常に重要で、もしそうでなければ、いま皆さんと一緒に、地球の全体と一緒に生きていくという感覚は決して生まれてこないことになる。この「みんなと一緒にいる」という感覚と、でも、「私は一人だけの何かを負っている」という矛盾する二つを両立するというか、重ね合わせしていくことは、これからの宗教にとって絶対的に

必要だと思っています。

○蓑輪 真宗の信仰が「しぎごと」になりがちだというのは、私も研究を始めてからいろいろな宗派を見ていて、ちよつと思つたことです。

たぶん親鸞聖人の教えの中では、自らを見ていく部分と、他者を見ていく部分の両方が存在していて、それは浄土真宗的な言葉を使えば、往相と還相で、往相のときにはおそらく自己の存在とか、実存的なものが出てくる。しかし、還相の視点に立つて、そういう境地を得た後、どうあるべきかというところに関しての捉え方が、少し弱くなつてしまつていゝのではないかという感じは受けます。

初期の仏典である『スッタニパータ』の中に面白い記述が出てきます。悟りを得た人がどうあるべきか。小林先生の言葉を借りれば、自らの自己存在の実存的な問題をちゃんと解決できた人が、どうあるべきかというのが出てきます。それが『メッター・スッタ』、慈悲の教えになつていて、他者どう向かい合つてい

くのかという点が、しっかりと説かれて

いる。そう考えると、車の両輪のように、自らを整えていく部分と、他者にどう関わっていくのかという部分の双方を、きちんとしていくというのが必要なのではないかと感じます。

○徳永 個人的な傾向が強いという一番大きな影響の一つとして、『歎異抄』に「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり」（『註釈版』八五三頁）とあることが挙げられます。これが浄土真宗全体の印象になつてしまったような気がします。ですから、『歎異抄』はよほど気を付けて扱わないと駄目だと思います。

○小林 逆に言えば、それは究極の構図なのでですね。極端に言えば、阿弥陀さまと自分を一对一に置いて、究極的に結び付けるといふ構図をつくるほど親鸞聖人は追い詰められていた人だと思つていゝます。だから、そこまで追い詰められていない、自分を追い詰めてもいない人

が、親鸞聖人が言っているからこうなんだといっても全然違う。宗教的なもの、一番怖いことは、書いてある言葉が決して科学の方程式みたいな真理ではないこ

とです。「誰」がどこでどう言ったのかによって、その意味がまったく変わります。他人の言葉を利用していただけなのか。ほんとうにそれを意味として生きて

いるのか。それが問われているのです。意味って重たいです。

閉会 座長あいさつ

総合研究所 所長

丘山 願海

小林先生、蓑輪先生、徳永寮頭、本当にありがとうございます。小林先生、蓑輪先生のお二人には刺激的なご提言を色々いただきましたが、やはり一つは、もう宗教以前の根本的な在り方から問い直していくことの必要性があるのではないかと受け取らせていただきました。

これを一つのきっかけにして、親鸞聖人御誕生八五〇年・立教開宗八〇〇年慶讃法要に向けて、本当にどうした

ら伝わっていくんだろうかということ、さまざまに工夫してやっていきたいと思いました。それは、私たちがどう生きていくか。あるいは、今の世界に生きている私たちがどうやって生きていくのかというのを、一人ひとりが問い直すところから出発していくことも関係すると思います。そうする中で、新しいこと、新しい言葉が紡ぎ出されてくると思います。

それから最後に、「新型」コロナウイ

ルス感染症拡大の中で、次の世代、時代を迎えていく。あるいは、もう突入している。親鸞聖人の時代は一人ひとりがまさに苦しんでいるから、末法を実感できたが、私たちの世界の状況を見れば末法でありながら、その中で快楽を求めて生きている」という指摘もありました。そういう意味では、少なくとも私は、あらためて宗門の在り方だけではなくて、そもそも自分の生き方をさらに問い直していかなければいけないと思いました。

本日は、先生方本当にありがとうございます。